

1 学校教育目標 未来を切り拓く北っ子 ～共に学び、共に感じ、共に生きる児童の育成～	2 本年度の重点目標 ◎学び合う力、つながり合う力、磨き合う生活の育成を図る。 ・教師力、組織力の育成と向上を目指す。 ・保護者・地域との連携・協働を進める。
---	---

達成度 A: ほぼ達成できた
B: 概ね達成できた
C: やや不十分である
D: 不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価							
① 学び合う力の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●志を高める教育	自分の夢に向かって努力する気持ちを高める教育活動の充実	・集団活動を通して、自分や友達の良さを知り、活動に生かそうとする態度を育てる。 ・自分を振り返る活動を行う中で、課題を見出し、より良くしようとする態度を育てる。	・全校や学年の集団活動の中で、児童一人一人の良いところを見出し、自信を持たせる。また、友達の良さに気づけるようにする。 ・振り返り活動を行うことで、児童が主体的に課題を見出し、次の活動に生かすようにする。 ・「共に生きるを考える日」の原稿放送を通して、「いのち」「多様性」「人権」について考える機会を設ける。	B	・児童朝会、なかよし集会、委員会活動、クラブ活動、縦割り活動などで、役割を持たせたり、友達との交流の場を設けたりすることで、自分や友達の良さを認める機会を作ることができた。 ・委員会、クラブ活動、縦割り掃除、縦割り遊びなど、活動後に振り返りを行った。縦割り掃除では、上級生が下級生のお掃除通知表を付ける活動なども行うことができた。 ・「共に生きるを考える日」では、人権に関わる話を聞くことにより、自分や友達の良さに気づかせることができた。	・引き続き、児童が自信を持ち、自分を高める態度を養っていききたい。今年度、縦割り掃除でリーダーが下級生のお掃除通知表を作ったように、高学年がリーダーシップを発揮し、下級生が手本としていくことで、集団の中で児童の意欲を高めていく。 ・「共に生きるを考える日」のように、子どもたちの心を耕す活動を通して、自分や周りの友達を認めたり、自己肯定感を高めたりできる機会を増やしていきたい。
教育活動	●学力の向上	学習規律の定着と学び合う学習集団の形成	・北っ子スタンダードの見直しと周知徹底 ・伝え合う活動を取り入れた授業実践 ・学年に応じた読書量と質の向上	・学期に1回、学年で学習規律の実施状況について振り返りを行い、取り組みが不十分な点を次の指導に活かす。 ・PW・GWを取り入れた授業実践を研究推進員・学力向上推進員を中心に推進する。 ・各学年のお薦めの本を含む月別目標(低10冊・中8冊・高6冊)を達成者数を調べ、全校に知らせることで読書意欲を高める。	A	・昨年度の北っ子スタンダードをもとに、4月に学習規律についての共通理解を図り、指導に役立てた。北っ子スタンダード(令和版)は、学習面に加え、生徒指導・清掃指導・給食指導も加え、年度内に完成予定。 ・1学期の学習規律の定着状況アンケート結果をもとに、学期の初めに、学校全体で重点的に取り組む内容を意識させる話【2学期物構え・3学期気構え】を行い、全校で取り組むことができた。・伝え合う活動(PW・GW等)を授業に取り入れ、自分の思いや考えを表現する機会が増え、抵抗がなくなってきた。・1か月の貸し出し冊数目標(低10冊、中8冊、高6冊)を低中が達成することができた。	・北っ子スタンダード(令和版)をもとに全職員で共通理解し、指導を継続する。 ・伝え合う活動を取り入れた授業実践が増えてきた。そこで、よい学び合いができていけるモデルを紹介する場を増やすことで、伝え合う活動のレベルを向上させていく。 ・日常の読書指導に加え、おすすめの本の紹介、図書館祭り等のイベントを通して読書を奨励し、読書活動の充実を図る。
		基礎基本の定着と活用力の育成	・4月・12月・2月にCRTや学力テストの分析結果をもとに対策を図る。 ・朝の時間を活用し、国語・算数の基礎・基本の定着を図る。 ・各学年の効果的な宿題の出し方を探る。	・分析結果をもとに、TTや少人数指導を効果的に取り入れ、指導の充実を図る。 ・基礎基本の定着を図るため音読・視写・言語事項・計算などの取り組みを徹底させる。 ・既習事項の定着や活用力を高める宿題の工夫を各学年で出し合い共有する。	B	・TTや少人数指導、単元に応じて習熟度別の授業も行うことができた。 ・朝の国語・算数タイムは、市販の教材も活用しながら、系統的に、習熟状況に応じて取り組むことができた。また、全学級複人数で対応することで、集中して取り組む場作りもできた。 ・各学年クラス間で宿題の量を揃えたり、継続的に既習事項の定着等を高める宿題を出したりしたことで、12月学力状況調査で昨年度よりも良い結果につなげることができた学年もあった。 ・給食前のすきま時間や昼休み中に、希望者や必要に応じて補充学習を行い、学習意欲・基礎学力の向上につなげることができた。	・朝の国語・算数タイムを継続し、今年度同様、複数人で対応していく。その中で苦手な内容・定着に時間がかかると思われる内容については、繰り返し復習したり、定着状況に合った内容に取り組ませたりするなど、柔軟に対応していきたい。 ・学力状況調査で良い結果につなげることができた学年は、宿題の出し方を工夫しただけでなく、やり直しまで確認するなどして、宿題に集中して取り組ませるなどの質の向上を図っていた。どの学年でも「できなかったことができるようになるためのやり直しの大切さ」を意識させ、「集中して取り組む、わからないことは調べるなど、宿題への取り組み方の質の向上」を目指していく。

学校運営	○教職員の資質向上	校内研究推進と個々の授業力向上	・「自ら考え、共に学ぶ児童の育成」の研究テーマのもと問題解決型の授業実践を全職員で行う。 ・年3回講師を招聘した全体研を開き、授業力の向上を図る。	・年間、算数一単元の授業実践を各学年で計画し、実施する。 ・学年ごとの系統性を見直し、伝え合う活動の充実を図る。 ・算数科の学習に関する児童の意識調査を5月・12月に実施し比較・分析を行う。	A	・全体、各学年部授業研において、多様な表現方法の取得、伝え合う活動の充実のための手立てについて協議し、授業改善につなげることができた。 ・表現や学習の系統表、ノートや板書のスタンダードモデルを充実させた。 ・自分の考えを友達に伝える活動が好きな児童が増えた。自分の考えの理由を説明すること、自分の考えと比較しながら聞くこと、理由を考えながら、ノートに自分の考えをまとめることを意識できる児童が増えた。	・日々の授業の中で、自分の考えを表現し合う伝え合う活動の取り入れ方を協議し、さらなる授業改善に取り組む。 ・表現や学習の系統表、ノートや板書のスタンダードモデルを活用し、系統性の共通理解とさらなる充実を図る。 ・自分の考えを分かりやすく伝えたり、自分の考えと比べながら聞いたりできるような具体的な手立てを充実させることにより、児童の自ら考え、共に学ぶ意識を高められるよう努める。
	○地域・保護者との連携	家庭との連携による学習習慣の定着	・保護者にむけた家庭学習への興味・関心の喚起 ・家庭学習の質・量の向上	・家庭学習の手引き(県・本校)を活用し、各家庭の学習環境を整えるよう啓発を図る。 ・「家庭学習がんばろう週間」を学期に1回実施し、家庭での取り組みの様子を集約する。さらに、結果を紹介することで啓発を図る。	B	・昨年度に比べ学年学習目標の時間を長くしたが、保護者アンケートでは前年度に比べ目標の時間を達成した割合は、昨年度より1割増えた。 ・保護者の家庭学習への関わりは、昨年度とほとんど変わりなかった。(保護者アンケートの結果)	・引き続き、家庭学習の定着に向けて家庭環境の整備等協力を呼びかけていくと共に、取り組みの実際について紹介する。 ・宿題だけではなく、自主学習や読書の取組を活性化させる機会を設ける。

②つながり合う心の育成

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	一人一人が認められる居心地のよい学級づくり	・「なかよしアンケート」で「学校が楽しい」と答える児童の割合を90%以上にする。	・「QUテスト」や「なかよしアンケート」を実施し、個に応じた指導を充実させ、児童理解に努める。 ・ケース会議、生徒指導協議会、教育相談部会を行い、対応策を検討し、組織として対応する。	B	・「なかよしアンケート」で学校が楽しいと答えた児童は86%となった。 ・事例に応じて会議を行い、対応することができた。また、外部の関連機関とも連携しながら対応を進めることができた。	・児童の問題を担任一人で抱え込まずに、全教職員で情報を共有し対応していく体制作りをこれまで以上に進めていくために、情報を共有する機会を多く持つようにする。
教育活動	●いじめ問題への対応	人権・同和教育、道徳教育等の充実	・自分も友達も、大切な存在であることを自覚させ、互いに認め合い、助け合う態度を育てる。 ・ケース会議、生徒指導協議会や教育相談部会を行い、対応策を検討し、組織として対応する。	・日常の観察やアンケート実施等により児童の人間関係に気を配り、トラブルの早急な対応・解決、好ましい人間関係づくりを進める。 ・集会活動やたてわり活動を通して児童相互の親睦を深めるとともに、学期に1回「共に生きる」を考える日を設定し、好ましい人間関係づくりを進める。	B	・6月の人権集会の取り組み(人権標語のクラス発表等)により、児童の人権意識の向上が図られた。 ・日常の観察やアンケート実施により、いじめの早期発見、早期対応につながったケースがあった。その一方で、不適切な言動がトラブルになることがあった。今後も、人権を大切にす継続的な取り組みが必要である。	・人権標語の取り組みや「共に生きるを考える日」は、次年度も継続して取り組んでいくと同時に、児童の人権意識を高める更なる取り組みの工夫をしていく。
教育活動	○特別支援教育の充実	教員の専門性・意識の向上と個に応じた指導・支援の充実	・発達障害や個別の支援・配慮を要する児童についての理解を深める。 ・個別の支援・配慮を要する児童を把握し、保護者、担任、専門機関と情報交換や連携をとりながら、支援にあたり、現状の改善に努める。	・特別支援学級、通級指導教室について全職員で研修する。専門性の高い外部講師による「発達障害」に関する研修会を行う。専門的知識を深めることで、それぞれの児童に対して適切な対応ができるようにする。 ・支援が必要な児童のケース会議を開き、支援方法等の見当を行うとともに、必要に応じて巡回相談、専門機関との連携を図る。支援が必要な情報を共有し、すべての職員が対応できる環境を整える。	A	・特別支援に関する研修会を行い、全員が専門性が向上したと感じる、実践に生かすことができるというアンケート結果だった。 ・定期的に「共に会議」を開き、生活支援員も含めて支援が必要な児童に対する対応の共通理解ができた。 ・支援レベルシートを作成し、「配慮を必要とする児童」を全職員で把握することができた。 ・ケース会議や巡回相談を行い、保護者や担任と連携を図って、効果的な支援を行うことができた。	・特別支援に関する研修会を行い、教職員の専門性の向上を図る。 ・ケース会議などを充実させ、教職員全員が、支援が必要な児童に対して対応できるようにする。

③磨き合う生活の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	・毎日、朝食を食べる児童の割合95%以上を継続する。 ・確実なアレルギー対応を実施する。	・早寝、早起き、朝ごはんの規則正しい生活習慣の定着を図るために、児童に対しては掲示物や委員会活動、家庭に対しては給食便り等を通して、定期的に働きかける。 ・全職員に食物アレルギー対応児童への周知徹底を図り、調理員と確実に実施する。	A	・毎日朝食を食べる児童の割合は、95%に伸びた。ただし、内容には偏りが見られた。 ・朝食ふりかえりカードの実施により、家庭も含めて食生活を見直す機会となり、規則正しい生活習慣の定着につながった。 ・アレルギー対応を確実に行うことができた。全職員で、エビベン講習を行い、緊急時の対応について共通理解を図ることができた。	・次年度も引き続き、朝食の大切さと規則正しい生活について、児童への継続的な指導と食育だより等による保護者への啓発を行う。 ・年度初め、全職員に食物アレルギー対応について共通理解を図り、アレルギー対応食の提供は確実に実施する。
教育活動	○落ち着いた生活環境づくり	校内ルールの徹底とマナーの育成	・進んであいさつができていますと答える保護者等の割合を85%以上とする。 ・新たな生徒指導の合言葉を覚え、きまりを守って生活する児童数を増やす。	・ルールやマナーを明文化し、生徒指導連絡会において職員が指導内容を共通理解し、統一した指導を行う。挨拶では、オアシス運動の周知徹底を図る。 ・今年度一部変更した生徒指導の合言葉を、生活朝会、学年朝会やクラス掲示等、機会を捉えて説明・指導し、落ち着いた学校生活が送れるようにする。	B	・進んで挨拶ができていますと答えた保護者アンケートの割合は73%と少なかった。しかし、その後、挨拶運動や挨拶の上手な児童を称賛することで、児童の挨拶の頻度や質は向上した。 ・合言葉は、十分に児童に浸透している。 ・月1回、生徒指導協議会により、校内の諸課題について職員の共通理解を図ることができ、問題の解決につなげることができた。	・挨拶は継続的な指導が必要である。児童会の挨拶運動は有効だった。学校外での挨拶については、保護者や地域の協力を仰いだり、児童の頑張り伝える機会を持ちたい。 ・生徒指導協議会を経て、児童に指導する内容があった場合には、児童に放送等で伝える機会を持ち、指導を行う。
学校運営	○地域・保護者との連携	家庭との連携による生活習慣の定着	・「北茂安小のやくそく」について、家庭と学校との共通理解を図りながら、児童の安全で安心な生活、望ましい生活習慣づくりを家庭と連携して進めていく。	・学級、学年、学校便り等で、「北茂安小のやくそく」(家庭・校外での生活)の中から、必要な項目を絞って重点的に取り上げることで、家庭と学校との共通理解を図り、指導を行っていく。 ・児童が、よくできている点を、集会や放送等で伝え、望ましい生活習慣の促しを行う。	C	・学校からの各便りや、地区懇談会、学級懇談会を通して、児童の生活上の課題や学校の方針等の共通理解を図ることができた。 ・登下校時のルール順守や挨拶等は不十分であり、その点が課題である。	・引き続き、学校外での児童の生活習慣について、各便りや懇談会を通して、家庭と学校との連携を図っていく。 ・よい点については、児童を褒め励ます機会を増やすと同時に、指導が必要な点について、児童や家庭に呼びかける工夫を考えていく。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目(あれば記入)

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策
教育活動	○教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	ICTの積極的かつ有効な授業及び業務への活用	・ICTを利用した授業を受けるのが楽しみだと感じる児童の増加と、ICTを利用する教員の授業や教材作成に関する技能の向上を目指す。	・電子黒板・ぼうけんくん(デジタルカメラ)・タブレットPC等の効果的な使用法や、教材作成に関する便利なツールや学習支援ソフト・便利なサイトについて、紹介・研修する場を設定する。 ・ICT教育推進リーダーとICT支援員、ICT担当者が連携しながら、ICT利活用に関する疑問や考えを話し合える雰囲気を作る。	B	・新任者への電子黒板・ぼうけんくん等の操作研修会については、授業開始前にICT支援員とICT教育推進リーダーが実施した。また、夏季研修会では、プログラミング教育で活用するスクラッチの研修を行った。 ・ICT支援員のサポートを受けながら、授業の中でICT機器の活用を積極的に行った。	・次年度より全面実施される学習指導要領では、児童の情報活用能力について体系的、計画的に身に付けさせる必要があるとされている。そのために、ICT機器を活用した情報活用能力の育成について、具体的な計画に基づいて指導をしていく。授業の中での活用の仕方や授業デザインの仕方など、算数の授業を中心にそのノウハウを共有していく。
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	勤務時間の適正化	・職員個人の毎月の時間外勤務時間を45時間以内にする。	・原則、月～木曜日の施錠時間を19時、金曜日(定時退勤日)の施錠時間を18時にし、週1日「家庭の日」を設定し、17時に退勤するようにする。 ・特定の職員に負担がかかることがないよう、チームで業務にあたる。このことは、学期に1回の校内衛生委員会の中で振り返りを行い、職場環境の改善を図る。	C	・4～12月までの全職員の時間外勤務の月平均は30.5時間となり、45時間以内をクリアできた。ただ、個別に見ると、月平均45時間以内の職員は全体の83%であり、14%の職員は月平均45.8～67.8時間の時間外勤務になっていて、この点についての改善が今後必要である。 ・退勤時間の声掛けや校内衛生委員会で改善策を検討してきたが、個別の事案についても検討し、改善を行っていく必要がある。	・次年度は、退勤時間を原則19時に設定して時間外勤務の縮小を図る。 ・個別の事案について校内衛生委員会等で検討し、全職員の時間外勤務時間を45時間以内にする。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

・重点目標①学び合う力の育成においては、北っ子スタンダードをもとに、全教職員で学習規律の共通理解を図り、指導を継続した。学期ごとに、実施状況を振り返りながら、指導を継続したことで、学習規律の定着が見られてきた。校内研究では、伝え合う活動を取り入れた授業実践(研究授業6回)を行った。児童が自分の思いや考えを表現する機会が増え、児童の表現力の向上につながった。図書の貸し出し目標も低・中学年では達成し、12月の学習状況調査は、昨年度よりも良い結果が多かった。今後は、家庭との連携を深めながら、このような取り組みを継続・発展し、児童の学力の向上を図っていききたい。

・重点目標②つながり合う心の育成においては、6月の人権集会の取り組みや学期ごとのアンケート等により、いじめの未然防止、早期発見、早期対応を行ってきた。事案発生の際は、丁寧に対応し、反省や謝罪の場を設け、改善を図り、解消を行った。今後は、児童の言葉遣いへの指導やお互いを思いやる心を育てる活動の充実など予防的指導に重点を置いていききたい。また「北茂安小のやくそく」など生活面でのルールについて、家庭と学校で共通理解を図り、指導の充実を図っていききたい。

・重点目標③磨き合う生活の育成においては、食育の取り組みで成果を上げている。今後は、アレルギー対応について職員研修の充実を図る必要がある。挨拶運動の取り組みは良かったが、アンケート結果は7割にとどまった。今後は、児童の活動の機会を増やすとともに、家庭との連携も図りながら、進んで挨拶ができる児童を増やしていきたい。

・重点項目に含まれない項目は、今年度の成果と課題を踏まえ、次年度のICTにおいてはプログラミング教育の研修や実践の充実を図っていききたい。働き方改革においては、今年度の目標を引継ぐが、より具体的な方策により、時間外勤務の縮小と業務の効率化を図っていききたい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目